

# 心のめばえ

<22>

著者／牟田 泰三  
挿絵／橋本 礼子

## 4歳11カ月 ダンゴムシ

お庭にアリさんがいた。捉まえて手のひらにのせると、歩き回ってすぐ落ちそうになる。そこでアヤはつまんでまた手のひらに戻す。

ジイジ「あまり強くつまむとアリさんは潰れそうになるから優しくつまもうね」

それでも次々と繰り返している。

ジイジ「もうアリさんも疲れているからお庭に返してあげようね」

アヤ「嫌だ」

ジイジ「もうお腹もすいているし、お家でママが待っているかも知れないよ。返してあげよう」

アヤ「じゃあ、ダンゴムシにする」

やつとアリさんは逃がしてもらえてヤレヤレ。でも、

ジイジ「ダンゴムシはこのあたりにはいないよ」

アヤ「いるよ。この植木鉢の木の根っこにいたのを見たよ」

植木鉢をくるとまわすと、あっ、ほんとにいた。

アヤ「ジイジ、こんなこと知らないの」

いつの間にこんなところでダンゴムシを見

つけていたんだろう。だんだんと独自に観

察をするようになっていくのだな。

アヤ「ダンゴムシさん、あめ玉みたい  
に丸くなってるね」

ジイジ「敵に襲われると丸く

なつて身を守るんだよ。でも、

そつとしておく、そのうち

様子を見て、安全だと思っ

と動き出すんだよ。ほら見

てごらん、アヤの手のひらの

上で長くなつたでしょ」

手のひらから落ちそうになつた

のでアヤがつかもうとするとまた

丸くなつてしまった。

アヤ「ダンゴムシは幼稚園にもいるよ」

ジイジ「そうだったの」

アヤ「〇〇ちゃん(男の子)がね、ダンゴムシつぶした」

ジイジ「えっ、それはいけないね。ダンゴムシが痛い痛いで言うでしょ」

アヤ「アヤは見ないようにしたの」

アヤはダンゴムシをつかんだままお部屋に持ち込んだ。ダンゴムシを床に置くと、どんど

ん這い回って、隅っこに逃げ込みそう。

ジイジ「いいこと教えてあげようか。つるつるのおわんに入れるといいんだよ」

台所の戸棚から味噌汁などをつぐおわんを取り出してダンゴムシを入れると、ダンゴムシが

這い出そうとしても、おわんの斜面で滑って這い出せない。これでダンゴムシをつまんで戻さ

なくてもよくなった。

ジイジ「でも、あまり長い間このままにしておくでダンゴムシさん、お腹をすかして死んでし

まうかも知れないから帰してあげようね」

**訂正とおわび** プレスネット年末年始号(2018年12月25日配布開始)14面の「心のめばえ21」の中で、誤りがありました。「ジイジの気付き」の内容は、正しくは「幼児期は美しいものを愛でる心が育つ大切な時期である」です。関係者の皆さまにご迷惑をお掛けしたことをおわびし、訂正いたします。

プロフィール むたたいぞう 1997年、福岡県生まれ。  
九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、  
理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福  
山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀  
樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(拓成書店)、「量子力  
学」(裳華屋)などがある。東広島市在住。

### ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。  
weekly@pressnet.co.jp  
「JSG@net」系へ